

---

# 十二月ひこう

中旗多恵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

十二月ひこう

### 【Nコード】

N4887M

### 【作者名】

中旗多恵

### 【あらすじ】

冬の早朝、イキは「1番高い切符の町」へ行くことを決意する。原動力は小さな好奇心と反抗心。無計画な旅の目的は「知らないことを知ること」。初めて訪れた町で出会う、様々な人たちと一匹の猫。そこでイキは、一体何を目に映すことになるのか。

## 出発

紺色のコートを羽織り、お気に入りのマフラーをグルグルと首に巻いた。

物音を立てないようにそつと歩くと、窓のカーテンを人差し指で開き外を覗く。

「明け方から雪が降るでしょう」

という昨夜の天気予報と違い、うつすら白んできた空の雲間から、太陽の光が差し込みそうだった。

荷物が一つ減ったな、と、荷物を詰め込んだあるリュックから長靴を取り出した。

奥においやられている折り畳み傘にも気付き、無理やりに取り出す。今回は2人でお留守番だ。

キイツと鳴くドアに冷や冷やしながら、イキは忍び足で部屋を抜け出した。

階段を下りて様子を窺い、人影がないのを確認すると早足で玄関へ向かう。

玄関先には、最近母が買ってきた新品のスニーカーと、履きつぶして汚れたスニーカーが礼儀正しく出番を待っていた。

イキは迷うことなく、汚れているが履き慣れているスニーカーを取り出し、ぎゅっと靴紐を結び直した。

このスニーカーは、すでに家を出ている兄からの唯一の“おさがり”だ。

母に「汚れてみっともないから捨てる」と言われ、新品のスニーカーを目の前に差し出されても、イキは断固として手放すことを拒否

した。

このスニーカーは、イキが初めてもらった兄の私物でもあるのだ。その宝物とも言えるスニーカーが、これからの長旅を共にする、イキにとって一番目の仲間になったことにイキは心底喜んだ。よろしく、と、手が汚れるのも気にせず撫でてやる。

リュックを背負うと、予想よりも重さがないことに気付き「さすが」と自分を褒めた。

と同時に、今度は荷物の重さもきちんと考えて荷造りしようと反省もした。

「行動するには1分あれば十分だが、行動する前に1時間考えなさい」というのは兄の言葉だ。

もしリュックが背負えないくらい重かったら、再び荷物の選別をするため時間がかかっていたことだろう。

玄関のドアノブをゆっくりと回して慎重にドアを開く。

ここで誰かを起こしてしまったら、今回の計画が台無しになってしまう。

靴音を立てないように外へ出、ドアを閉める刹那室内を見渡し、まるでそこに子犬を見つけたかのような笑顔を浮かべた。

「いつてきます。しばらく、さよなら」

呟いた声は、ドアが閉まる音と共に静寂の広がる室内へすっと飲み込まれた。

ここまで来ればこっちのもの。

イキは白い息を吐きながら、駅に向かって走り出した。

時刻は4時00分を回ったところ。

この時間帯の街がどのような顔をしているのか、イキは今まで見たことがなかった。

太陽がないせいで街中がモノクロームになり、空気はいつもより冷

たく鋭い。

足をうごかす度に頬が痛く、呼吸をする度にかき氷を食べたような爽快感で体が満ちた。

普段見ることのない街の様子に胸が躍り、走るスピードがどんどん速まっていく。

いつもなら20分かかる道程を、その半分もかからずに駅に到着してしまった。

肩で息をしながら切符売り場へ向かう。

5時にもならない時分では、さすがに人影は一切ない。

窓口の駅員は椅子に腰をかけ、ウトウトと夢を見ているようだった。これなら切符を買わなくても良さそうだと悪い考えが浮かんだが、さすがにやめておこうと思い直す。

到着駅の駅員が、同じようにウトウトしているとは限らない。

ずるが発覚して自宅に連絡されでもしたら、イキはしばらく外出禁止だ。

一度、門限である17時を過ぎてから帰宅したとき、母にこっぴどく怒られたのは記憶に新しい。

そのときは、たった1時間門限を破っただけで1週間の外出禁止を言い渡されたのだった。

学校と自宅を行き来するだけの1週間は、決して行儀のいいわけではないイキにとって1カ月のようにも感じた。

あんなのはまっぴらごめんだ。

手のひらで額の汗を拭いながら、自動切符販売機の表示を見る。

値段は120円から3,700円までと様々だ。

3,700円もあつたら、お菓子とゲームがいくつ買えるだろうと想像しつつ、4,000円を投入して3,700円の切符を購入した。

行き先は全く知らない場所。

だが、数時間後には知っている場所になっていることだろう。

片道切符をしっかりと握り、眠たげな駅員のいる改札口を通り駅のホームへ下りていく。

「大人と一緒にないと駄目」

と咎められはしないかと心配していたイキは、夢心地で切符を切ってくれた駅員に感謝した。

## 兄からの手紙

列車の車内は、イキ以外の乗客は誰もいないというのにご丁寧に暖房が効いていた。

イキはマフラーを外し、コートを脱いで窓の外を眺めながら、胸の高鳴りを落ち着かせようとした。

ここまでは計画通り、問題はこれからだな。

何せ、これからの計画は一切決まっていない。

到着駅がどういう場所なのかさっぱり分からず、自宅を出発するところから電車に乗るところまでしか計画を立てていなかったのだ。ただ1つ決まっていることと言えば、この一人旅の目的くらいである。

目的は「知らないことを知ること」。

きっかけは、兄から届いた手紙に同封されていた写真だった。

イキの住む街では、どんなに寒くても雪が降ることはなかった。

それはイキが生まれるずっと前かららしく、父でさえも雪が降るのを見たことがないという。

冬が訪れると雪が降らないかと勝手に期待しては、勝手に裏切られた気分を味わうのが通例だ。

そんな中、家を出て連絡を絶っていた兄からイキ宛に手紙が届いた。一体何年ぶりだっただろうか。

宛名を見たイキは大急ぎで封を切り、手紙を取り出した。

元気に過ごしているか、風邪は引いていないかという内容で、相変わらず無骨な兄に思わず口元を緩めたものだ。

父と母にも手紙を読ませようと思ったところ、ふと手紙以外に写真

が入っているのに気がついた。

写っているのは、大雪に覆われた町。

ビルやマンションで埋まっているイキの住む街とは真逆の、のどかそうな町が真っ白に染まっている写真だった。

おそらく兄の住むアパートの窓から撮影したのだろう。

ポツリポツリと建つ家々を見下ろし、画面の遠くには、凍っているのではないかと思うほど冷たい顔をした海がチラリと写っている。

こんな場所に兄はいるのか。

家出同然で飛び出した兄は、両親にもイキにも居場所を教えていない。

ただ、この写真のお陰で兄が北へいることが知れた。

雪の降る北へ行けば、兄に会えるかもしれない。

会えなくてもいい、兄のいる場所と同じように、雪で覆われる場所へ行ってみたい。

そんな単純な動機で、イキは今回の一人旅を決意したのだった。

母が知ったら、おそらく泣くであろう。

兄だけではなく、イキも自分のそばから離れてしまったのか、と。

リュックにしのばせておいたその写真を取り出し、車窓の景色と見比べてみる。

雪など降りそうもないほど明るくなってきた空に、イキは若干の不安を覚えた。

でも、到着するまでまだ何時間もあるんだ。

そのうちに空模様も変わるだろう、と、不謹慎ながら天候が悪化することを願い、写真をそっとしまった。

ガタンガタンと揺れるのが心地よく、イキは少し寝てしまおうとリュックを枕に体を横たえた。

すでに1時間は乗っているだろうか、それでも乗客は乗ってこない。

まどろむ頭で、そうか、この時期に北へ行く人は少ないだろうなと考える。

それなら好都合だ。

知り合いに会いでもしたら、真っ先に家族に知られてしまうもんな。イキは暖かい車内で、静かに目を閉じた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4887m/>

---

十二月ひこう

2010年10月9日18時56分発行